

観音寺跡石塔群調査報告

2024年5月3日 佐世保史談会 垣田鉄郎

と き：2024年5月3日(金)

場 所：長崎県松浦市志佐町里免

メンバー：石塔研究家の大石先生／田平の郷土史家・山下さん／案内人・前岳さん／
佐世保史談会・垣田 以上4名

今回は直谷城姫落とし伝説にまつわる稚児神社調査でお世話になった前岳さんの案内で観音寺跡地を訪れた。ここに前岳さんのご先祖にあたる方のお墓があるとのことであった。場所は松浦市史の記述を手がかりに前岳さんが発見して、ご先祖の墓石に名前らしき文字が刻印されているので、大石先生に拓本をとっていただける事になった。

墓地は寿昌寺(陣内城跡)から北東方面へ観音寺溜池へ登る車道の右下にあった。長い間人が立ち入っていないような荒廃した墓地で山中の斜面に二段の平場があり、木立に紛れるように墓石が並んで倒れているものもあった。正面から見て右上上段には一際目立つ大きな宝篋印塔が3基並んでいる。他には江戸期の無縫塔がある。上段左手は比較的新しい近代の墓石がある。右手下段には1500年代後半～江戸初期の五輪塔など数基がある。そして左手下段は特に荒廃がひどく、草木を払って見ると10基以上の中世から近世にかけての宝篋印塔や五輪塔がバラバラの状態で見え隠れしている。



上段右手の古い宝篋印塔(一番奥が前岳さんのご先祖)

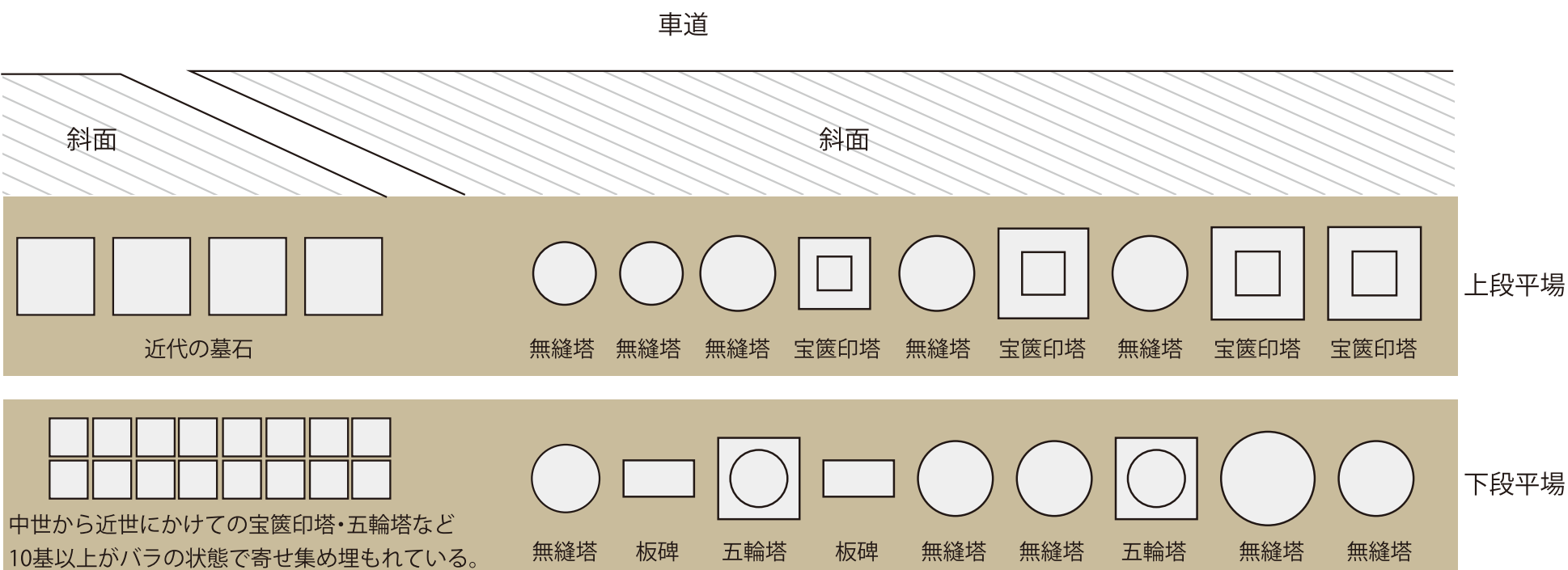


上段右手



下段右手

■墓石群見取図

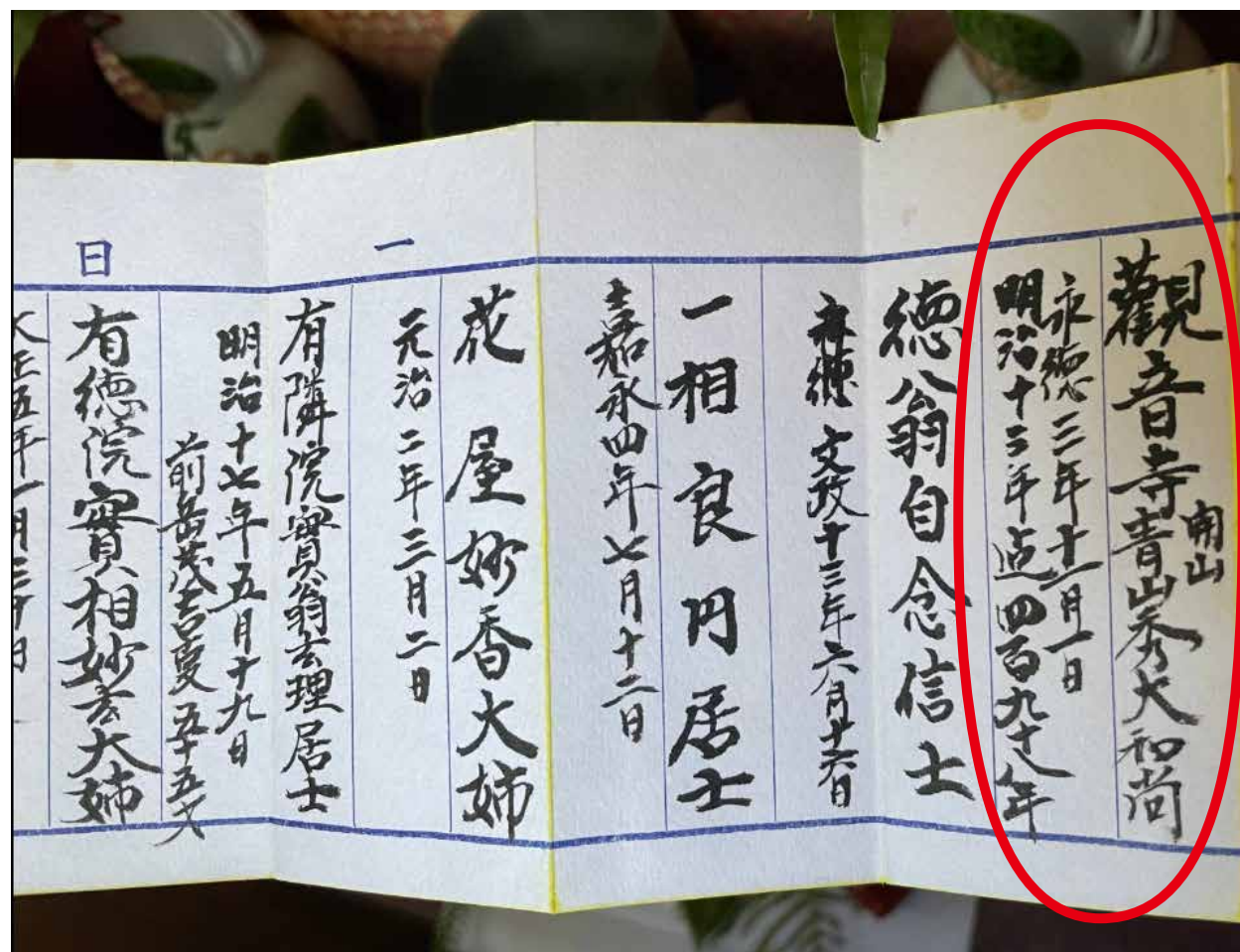
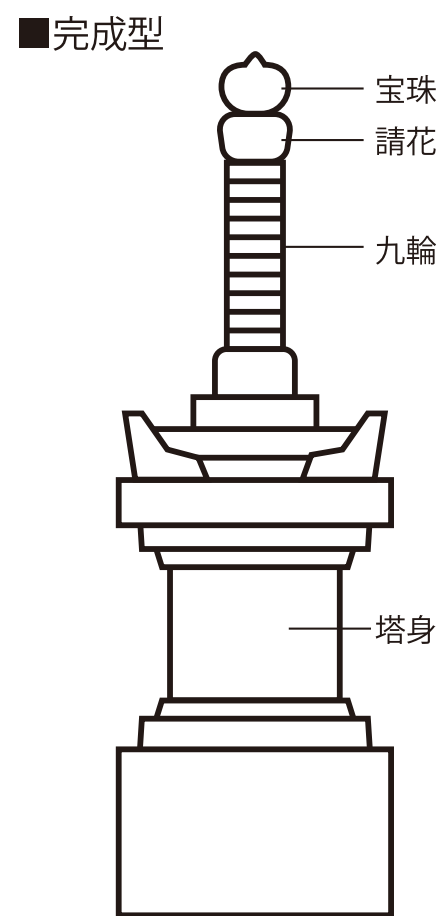


①右上上段の永徳三年(1383年)の宝篋印塔

右上上段右端にひときわ大きな苔むした宝篋印塔がある。佐世保では大型の宝篋印塔といえば崎岡に1基あるが他には見当たらない。この大きさの宝篋印塔は戦国以前のもので1300年代後半から1400年代にかけてのもの、石質は安山岩だろうか？はっきりと分らない。肥前型の宝篋印塔で佐賀で多く見られるとの事であった。

お墓を支えている土台部分の石積みは江戸期に造られたもので、3基の古い宝篋印塔は元々この場所にあったのかはわからないが江戸時代に一度土台が造られて新たに並び直されているようだ。松浦市史には「**観音寺は初め直谷にあったが、安永七年(1778)に志佐中学校上方字観音寺に造営され**」とあるので、この宝篋印塔は直谷から移したもののだろうか、大石先生の見解は移したのではなく元々この辺りにあったものだろうとのことであった。

今回前岳さんのご先祖にあたる墓石は右端の宝篋印塔であろうかと思われる。他の宝篋印塔には刻まれていない文字が基壇部分にうっすらと見える。前岳さんの調べによると檀家である古川寺の過去帳に書かれている「**観音寺開山 青山秀大和尚**」という方がご先祖で「**永徳三年十一月一日**」に亡くなられているようである。お位牌は寿昌寺に安置されている。それらの事は松浦市史の観音寺の項にも書かれており「**開山の青山秀大和尚青の墓は同所里道右下にあり。永徳三年遷化[※](せんげ)と同寺過去帳にあり。**」とある。今回の拓本でこれらのことが分かればこの石塔が前岳さんのご先祖のものだということが証明される事になる。



古川寺過去帳



寿昌寺位牌堂

塔身部分が欠損している。宝篋印塔でよくあることだが塔身は四角形で使い勝手の良さから他の用途に利用される事がある。ここの宝篋印塔は全て塔身が欠損している。他にも九輪部分の横ラインが5本しかなく完成時は9本あったはずなので4本分とその上に乗っていたであろう宝珠部分が欠損している。以上のことから当初の全体の高さは現在の倍ほどの2m近くはあったのではないと思われる。

※遷化(せんげ)＝住職が亡くなる事

②拓本作業

先生曰く拓本は風と日光との戦いでこの日は風もなく場所も日陰なので作業環境は良好であった。まず専用の紙を基壇部分にテープで止める。この紙も色々種類があり、先生がいつも取り寄せているものを使用。文字が摩耗して薄れている今回のような場合は薄手の紙がいいとの事。次に水とノリの成分が入ったものをスプレーで全体に吹き付ける。その後15分ほど時間を置いて紙が乾くか乾かないかくらいのところでブラシを使って打ち付けて行く。この待ち時間も文字の状態や天候等により変わってくるみたいだ。そしてこのブラシでの打ち付けが難しく素人がやるとまず紙が破れてしまう。先生曰く慣れるには数をこなすしかないとの事。空気の入った箇所が無くなるくらい叩いていくと、この時点で文字が浮かび上がってくる。その後墨汁を含ませたタンポで軽く叩く。文字の輪郭の外側から輪郭を浮かび上がらせるように優しく叩いていく。この作業を根気強く続けて文字の輪郭を縁取りながら進めていく。午後1時～6時までの約5時間の作業で見事に文字が浮かび上がってきた。

「**當寺開山 青山秀禪師 永徳三年 □一月 住持□□**」崩れて読めない箇所もあるがほとんどの文字が解読できた。このお寺を開山した**青山秀禪師**という方が**永徳三年(1383年)□一月**に亡くなって建立されたお墓である事がはっきりした。**一月**の上の字が崩れてはいるが過去帳から推測すると**拾**という文字ではないかと思われる。**拾一月(11月)**という事であろうか。**住持**の下の子二文字が判別できないが大石先生の見解ではこのお墓を建立した人物の名前が刻まれているのではないかとこの事であった。浮かび上がってきた文字が過去帳や位牌の記述と合致した事でこの石塔が前岳さんのご先祖のお墓である事が証明された。



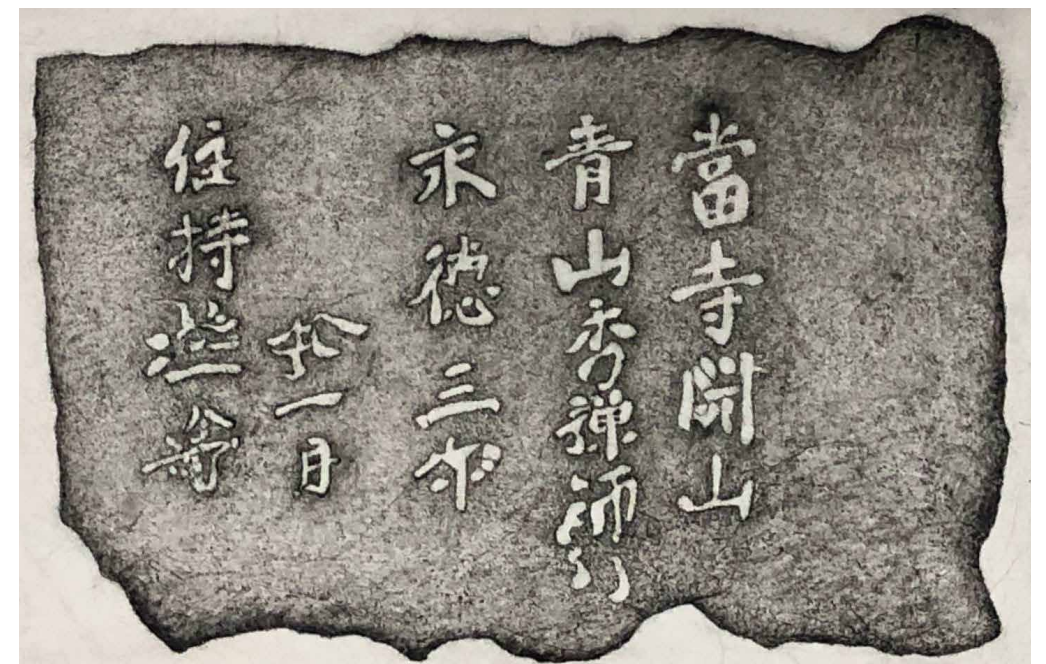
拓本前



拓本作業中



拓本後



當寺開山
青山秀禪師
永徳三年
拾一月
住持□□

③左手下段の日引石塔

左手下段は一見何もないように見えたがよく見ると草木の中に石塔の一部が見え隠れしていた。そこで絡まった草木を払って見るとバラバラになった石塔が数多く出てきた。10～20基はある。他にも土を掘ればまだ出てきそうだった。中世から近世にかけての宝篋印塔や五輪塔などで一箇所に寄せ集められていたものが年月が経ち土砂によって埋もれてしまっていたようだ。

先生の指導により1基組み合わせてみた。1500年代後半の小型の宝篋印塔であった。このような石塔が他にもバラバラの状態ですら10基以上は埋もれている。

その中で先生も驚くものが出てきた。**日引石塔(ひびきせきとう)**の一部である。先生曰く**日引石塔**とは福井県高浜町日引(ひびき)で産出した「日引石(ひびきいし)」(安山岩質凝灰岩)を使用した石塔のこと。主に14世紀後半から15世紀にかけてのもので、種目のほとんどは五輪塔と宝篋印塔で、その彫出技術は地元製作塔よりも高度で、見事な造りとなっている。対馬や平戸、五島列島、さらには鷹島や的山大島など長崎県下の島々で約450基分確認されており、その異常なまでの集中的建塔には目を見張るものがある。このことは中世の日本海ルートがいかに活発であったかを示す一方、中世において対馬や平戸、五島列島など、国境をまたぐ島々が一時的なバブル経済の状態にあったことを物語っている。おそらく中国大陆から朝鮮半島に至る大海原を駆けめぐり、広大な海のネットワークを築き上げた海の民(倭寇＝わこう)がその建塔に関わっていたように思われる。

今から600年ほど前、遠路はるばる若狭湾から日本海ルートで運ばれてきた石塔。みやこ風の石塔を取り入れる事が有力者たちのステイタスでもあったのだろうか、今回そのような石塔がこの場所(志佐町)で見つかった事は何を物語るのだろうか、あれやこれやと思いを巡らせながら石塔を元の場所へ戻し、引上げる事にした。



日引石塔の風輪空輪部分(1300年後半～1400年前半)

※風輪と空輪の境目にあたるくびれ部分の切り込みの鋭角さが地元制作塔とは違う。

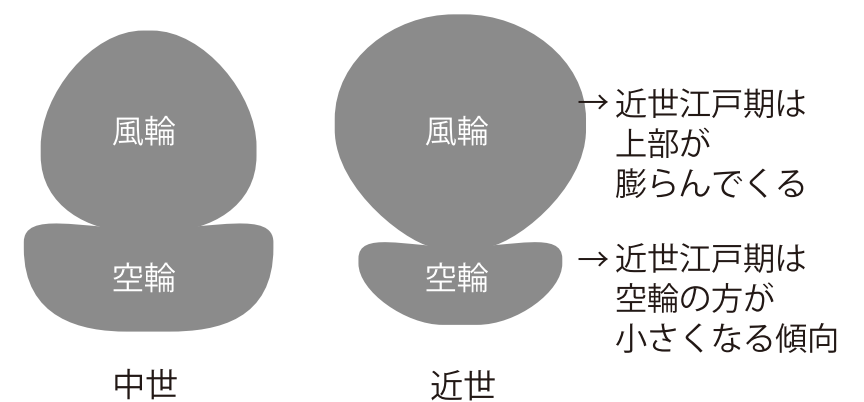


中世から近世にかけての宝篋印塔・五輪塔など10～20基がバラバラの状態で見つかった



蘇った1500年代後半の宝篋印塔

■五輪塔風輪空輪部分のシルエットによる年代の見分け方(あくまで一例)



④ 観音寺の謎

ところで観音寺というお寺はどこにあったのだろうか、今のところ手掛かりとしては右記の松浦市史の記述と、描かれた年代が不明な志佐城図の2つである。

石塔群の周辺を探して見ても記述にあるような**泉水の跡、石段、地藏台座**などは見つからなかった。しかし図が示す位置からして石塔群の近辺にあるのは間違いない。

もう一つの謎は「**初め直谷にあったが、安永七年(1778)に造営され**」の記述である。これによると永徳三年(1383年)に直谷の地で開山した観音寺が江戸後期になってこの場所へ移ってきた事になる。それはどうも腑に落ちない。順番的には内陸の直谷より久公下向の地の梶谷に近い海岸のこの場所が先に栄えてお寺を造営するのもこちらが先のように思えるからである。

しかも今のところ直谷に観音寺というお寺の痕跡はなく。今回の調査で永徳三年(1383年)の宝篋印塔や日引石塔や多数の中世石塔が確認でき、しかも南北朝時代の宝篋印塔は他所から持ち込まれたものではないであろうとの大石先生の見解もある事から、観音寺は安永七年(1778年)よりはるか昔からこの場所にあったのではないだろうかと思ってしまう。

しかしそれならば「松浦市史」の記述はどういう事か、もしかしたら観音寺とは呼び名が別の何かしらの宗教施設が元々ここにあって、そこにこれらの石塔は祀られていたのかもしれない。

志佐(陣の内)城から鬼門である北東方向に位置するこの場所にお寺があった事は当然かとも思われる。この謎は今後の課題となった。

⑤ まとめ

今回は大石先生の作業を初めから終わりまで見学させて頂いたのは良い経験となった。そして先生も感銘を受けられていたが、これほど立派でしかも南北朝という古い時代の石塔の文字をその子孫の方の立ち会いのもとで解明していくことなど先生といえども珍しい事だったのかもしれない。

私も641年の時を経て前岳さんとご先祖が繋がった瞬間に立ち会えた事は大変光栄であった。

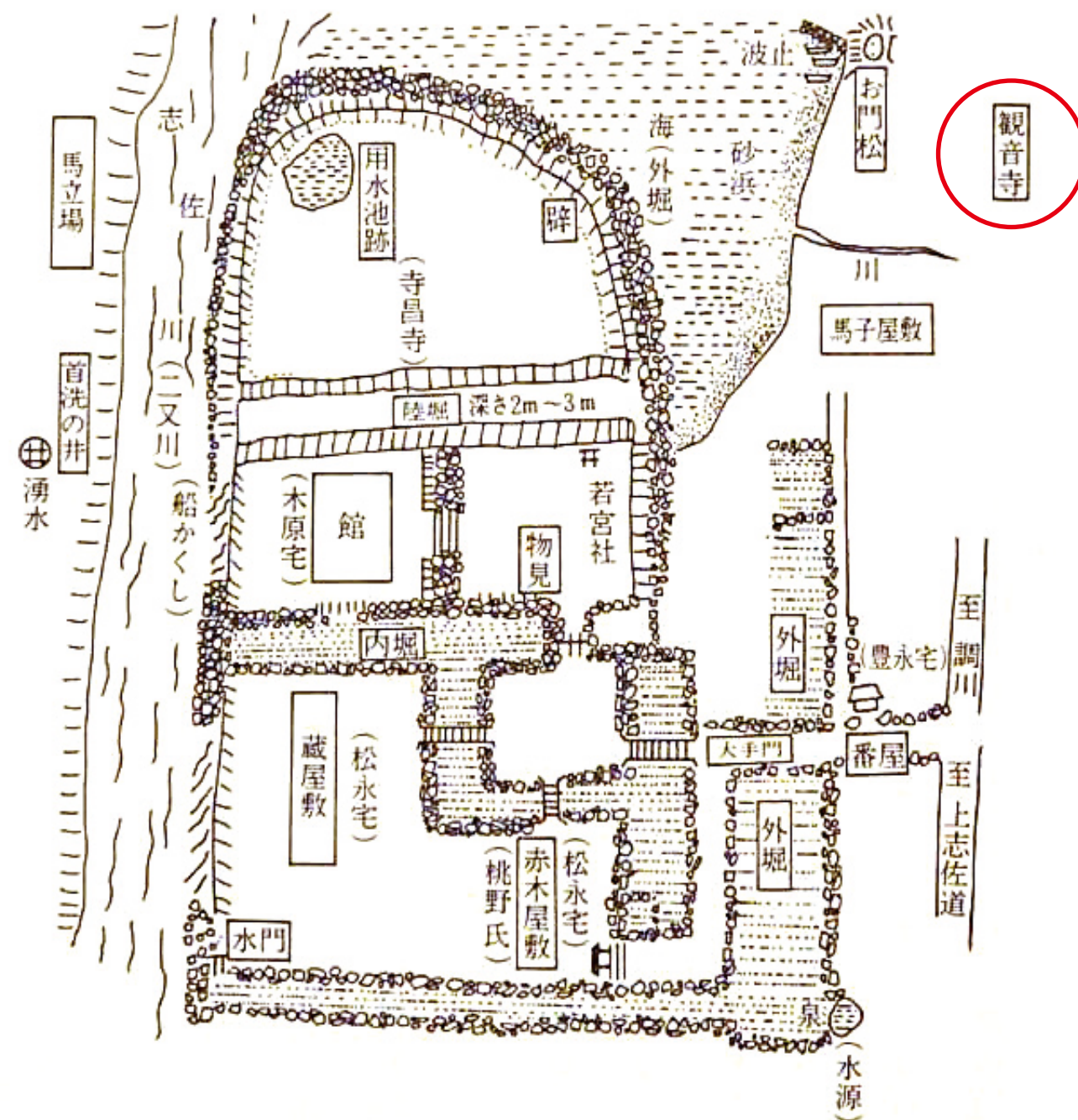
しかしこれほど立派で大きな石塔を造らせた青山秀禅師とはどういう人物だったのか、想像になるが、このあたりの有力者となれば志佐氏に関連した人物であり、という事は前期倭寇として海を舞台に活躍していた人物で、隠居して仏門入りしたのかもしれない。仏門入りと言っても当時と今のお坊さんとでは性質が違う。場合によっては戦いもする有力者でもあった。时期的には元寇から100年も経たない頃の時代、まだ元寇の痛ましい記憶が色濃く残っている時代であり、またそこからの復興を遂げた時代でもある。特に今回発見された日引石塔などは元寇からの復興の一つの証でもある。

全体的には南北朝時代から江戸期にかけての多種多様な石塔が数多く見られる一大墓石群と言える。貴重な遺構群であり更なる調査、修復整備を望みたい。

観音寺は志佐氏の菩提寺。初め直谷にあったが、安永七年(1778)に志佐中学校上方字観音寺に造営され明治四年廃となった。現在泉水の跡、石段、地藏台座などが残る

「松浦市史」357p観音寺の項より

志佐（陣の内）城図



「松浦市史」149p志佐城の項より